2025年に帰還した元少年兵。先輩たち（先に帰還していた元少女兵たち）に教わりながら、洋裁の訓練に励んでいます。（2025年6月撮影）

結晶母

Newsletter Kessho-mo

願いをチカラに、平和をつくる

— 2025年 冬号 —

Terra Renaissance

特別インタビュー

「元子ども兵」社会復帰支援事業20周年に寄せて

創始者・鬼丸昌也インタビュー

今年はテラ・ルネッサンスが「元子ども兵」の社会復帰支援に取り組み始めて、20年目の節目の年。活動のはじまりと、現在の挑戦について語りました。

インタビューとまとめ：広報室インターン　村瀬みゆ

見ないふりはできなかった「見えない兵士」の存在

2001年にテラ・ルネッサンスを設立した当初は、カンボジアの地雷除去支援、また除隊兵士の社会復帰や自立を支援する活動を行っていました。

その活動の中で、「子ども兵」というテーマに関心をもつきっかけが二つありました。一つはカンボジアの地雷被害者にも「子ども兵」がおり、身体にのこる障害や様々な精神的な苦痛が、いまだにその人の人生に影響を及ぼしていると知ったことです。

更に、「子ども兵」は確認されてるだけで世界で25万人から30万人もいること、「子ども兵」であることも認識されず、「見えない兵士」と呼ばれている子どもたちがいることを知りました。「子ども兵」って課題は一体何なんだろう、私達が何か取り組むことはできないんだろうかと考えました。

第一歩として、2003年にまずイギリスに行き、そこで「子ども兵」の問題と小型武器の問題を調べました。様々な情報を集め、日本国内でも戦場ジャーナリストの方に話を聞くことを通して分析をし、結果、2004年2月にウガンダを訪れることになりました。

1年かけてお金を集め、小川真吾を送り出した

以前から友人であった小川真吾さんとは、どうしたら世界が平和になるんだろうということを語り合っていた仲でした。

当時彼はまだ別の団体に勤めていましたが、「一緒にやろう」と決めて、私は1年かけて講演を行ってお金を集め、2005年に小川はウガンダへ赴きました。

まずはウガンダの首都・カンパラに拠点を構え、簡単な職業訓練や識字教育を少しずつ始めていきました。

当時まだウガンダ北部は外務省の退避勧告地域でしたし、ウガンダ北部において、神の抵抗軍（LRA）の散発的な村々への襲撃が実際にまだ行われていた時期でした。

再生の場所「スマイルハウス」

現在ウガンダにある私たちの施設が、支援者様のご寄付によって建てられた「スマイルハウス」です。ここでは、自身も元子ども兵だったり紛争で家族を喪った過去を持つスタッフが、職業訓練や識字教育、心のケアを行います。自尊心を育て、コミュニティへの巣立ちをサポートするんです。

左：鬼丸昌也 右：小川真吾/2008年の書籍出版記念当時の写真

過酷な過去を乗り越えた彼ら・彼女らが自ら収入を得て、家族を養い安定した生活を行っていること自体が、地域の平和や安定に貢献していると私は思っています。

「自分にも何かを成し遂げる力がある」「自分にも何かを変える力がある」って自覚をしてもらうことが、結果として、地域やコミュニティに対して、何らかの良い影響を与えることがあるんだろうと思ってるんです。

「ペイフォワード」は日本式恩送りのこころ

ペイフォワードプロジェクトとは、社会復帰支援プロジェクトを卒業した元子ども兵たちに、資金や機材の提供をし、そこで得た収益を我々に返済するのではなく、次の人に還元する。次の人たちがまたそれで自立し、生活を改善していく、というプロジェクトです。いわゆる「恩送り」を応援する事業ですね。

助けられる側だった元子ども兵が、今度は地域の誰かを助ける側に回る。人として本当に過酷な、いわゆる尊厳を奪われるような体験をしてきた。でも根こそぎ人間性が奪われたわけではなかったんですね。

誰かに関心を持たれ、誰かにサポートをされると、自分の中の「人間らしく生きたい」という気持ちがわき出でてきて、結果、今のような循環が生まれる。僕はそれが人間の本性だと思います。

「紛争を、終わらせる。」に込めた思い

皆様もご存じの通り、テラ・ルネッサンスはこの子ども兵の問題を含め、紛争に関連する課題に取り組んでいます。そのうえで、その課題を生み出す紛争そのものを、紛争を生み出す社会構造そのものを何とかしたいという想いから啓発や政策提言も併せてやっています。

ですが、ウガンダの「神の抵抗軍（LRA）」による紛争はまだ終わってないわけですよ。多くの「子ども兵」を生み出している紛争そのものを何とかしないと、この地域における「子ども兵」問題の解決には至らないわけです。紛争を終わらせるというテーマは、LRAにいる元子ども兵たちを残らず故郷に帰還させることを意味します。テラ・ルネッサンスの「誓い」の反映ですね。

寄付は、社会参加の第一歩

皆様が寄付をするときに、きっと心の中で元子ども兵のことであったり、今困難を抱えた人々のことを想うはずなんですよね。

それを想った瞬間に、距離や民族関係なく、その誰かを思いやれている。その思いやりが広がっていけば、きっと私は紛争を終わらせることができる、世界を平和にすることができると考えています。

紛争を終わらせるというのは無謀な壮大な夢かもしれませんが、現実のものに変えていきたいと思っています。1人でも多くの方に冬季募金に参加していただきたい。それがテラ・ルネッサンスの、私自身の願いです。

「ぼくは13歳 職業、兵士。」
―あなたが戦争のある村で生まれたら―
鬼丸昌也・小川真吾/共著

紛争を、終わらせる。2025
-その歩みを止めないために-
目標金額 5000万円
冬季募金キャンペーンにどうかご協力ください。2026/1/15迄

私たちの決意— 紛争を、終わらせる。
2026年、500人の「ただいま」を叶える！

**“ただ、家に帰りたい。”
その願いが、いま500人の命を動かしている。**

テラ・ルネッサンスで支援を受け、社会復帰を果たした元子ども兵が周囲の貧しい人びとを助けるなどの「恩送り」の活動が広がっています。

2023年、社会復帰をはたした元子ども兵のパトリック・ルムンバらは、今も武装勢力にとらわれている仲間を想い、組織からの脱出を呼びかけに行きました。

「君たちも戻れるんだ。自分を見ろ——同じように、社会に戻れるんだ。勇気を出して、一歩を踏み出そう」

その呼びかけに応じて、長い間帰還できなかった141名が、ついに故郷へ戻ってきたのです。

その波が今、大きなうねりとなろうとしています。

かつてない大型の帰還、500名の元子ども兵を家路に導くチャンスが訪れています。

奪われた子どもらを家族の元に、地域に返す。この地に癒しと赦しが戻ってくる。

そしてやがては、武装勢力の内部からの弱体化——つまり「紛争を終わらせる」ことそのものを意味します。

この挑戦は、世界がまだ見ぬ平和の実現モデルを示す挑戦でもあります。

「ただ、家に帰りたい」彼ら・彼女らの願いを叶え、生きて再び家族のもとへ導き帰す。そして二度と、子どもたちが暴力の支配する世界へ連れ去られ、銃を持たされることがない世界を、この地で実現します。

●地理的な背景について

- 元子ども兵は、ウガンダやコンゴ民で幼い頃に拉致され、現在その多くが国外、スーダンなどの拠点に連れ去られています。
- 帰還を求めている約 500 名の元子ども兵らは、スーダンにいます。
- 帰還ルートは、まず中央アフリカを経由する必要があります。そのために中央アフリカ省庁に理解を求めて海外事業部長の小川真吾が奔走してきました。
- 目指すゴールは、テラ・ルネッサンスの施設があるコンゴ民のファラジェ、ウガンダのグル。500 人の人生を取り戻すために、今が正念場です。

帰還者のいま

2023年に帰還した141名のうち56名は、テラ・ルネッサンスの社会復帰訓練施設「スマイルハウス」の12期生として、自立に向けた3年間のプログラムの途上にあります。

子どもの頃に武装勢力に拉致され、命令が全ての世界で生きてきた彼ら・彼女らは、おずおずと自信なさげで、自己主張したり自分でなにかを選ぶのが苦手でした。

スマイルハウスでは、まず、木工大工と洋裁・服飾デザインのクラスを体験して、希望するコースを選びました。

また、識字教育や計算、心理ケアのための音楽・伝統ダンスのクラスに参加しました。乳幼児がいる女性は訓練に集中できるように、託児所も整備しました。

当初は皆、心を閉ざし、暗い表情が目立ちましたが、少しずつ笑顔が見られるようになりました。

「武器ではなく、誰かを助ける技術を身につけて生きていくんだ」

2025年夏、12期生たちは前半の訓練、1年半の基礎訓練を卒業し、修了式が盛大に行われました。そして、はたらきながら自立を目指す後半の実地訓練が始まりました。現在は施設を出て、コミュニティの中で関係性をつくり、生きることを学んでいるところです。

この笑顔を、次は500人に取り戻したい。今こそ、人生を彼らの手に返すときです。

そして紛争を終わらせる。それが私たちの誓いです。

紛争を、終わらせる。2025

-その歩みを止めないために-

目標金額 5000万円

冬季募金キャンペーンにどうかご協力ください。2026/1/15迄

命と暮らしを支える、平和の最前線。この歩みを止めないために——どうか、あたたかいほほえみを。私たちの背中を押してください。

● ウガンダ　周辺国政府とたしかな信頼関係をむすぶ。

海外事業部長・小川真吾は、中央アフリカ共和国やコンゴ民主共和国など、紛争地に近い地域の政府・軍・宗教指導者らと協議を重ね、国境をまたいで連れ去られた元子ども兵らの帰還ルートを確保するため、奔走しています。

２０２４年には中央アフリカの政府機関と正式に協力覚書を締結。さらに、和平構築を所管する大臣との会談を経て、２０２５年10月には中央アフリカ大統領との面談も実現しました（写真左）。

● ウクライナ　長く凍える冬を越えるため、希望の拠点を築く。

避難生活が続くウクライナ西部では、命をつなぐ食と支え合いが欠かせません。

食料配布や炊き出し拠点「キッチンポイント」を整備し、温かい食事を届けています。避難民自身がスタッフとして働き、地域の絆を取り戻しています。

さらに、託児や学びの場を備えた「総合福祉センター」が間もなく完成予定です。人々の心の拠り所となるあらたな居場所、地域のともしびとなるでしょう。

「ありがとう!」これまで歩んでこられたのは、皆さまのご支援のおかげです。

● ラオス　不発弾が残る地で、子どもたちの命と暮らしを守る。

「本当は、桃太郎とかアンパンマンとか、子どもらしい紙芝居を見せてあげたい。だけど・・・」

ベトナム戦争時代、ラオスは中立国であったにもかかわらず、大量の爆弾が投下されました。地中に眠る不発弾が、いまも子どもたちを傷つけています。テラ・ルネッサンスは3歳からの幼児教育「不発弾回避教育」で、歌や紙芝居を通じて、爆弾を見つけても〝触らない・大人に知らせる〟習慣を子どもたちに徹底的に身につけさせています。

愛子内親王殿下のラオスご訪問！

11月に愛子さまのラオスご訪問があり、テラルネ内部もおおいに盛り上がりました！

実はご訪問当日、見学される不発弾問題の展示施設コープビジターセンター内に展示ブースを出しませんかと、ラオス政府機関から招かれたのです。

子ども達への教育教材や養蜂事業のハチミツなど、さまざまな活動の様子を心をこめて展示しました。

職員は同席できませんでしたが、センター職員のカムチャンさんがテラルネのことを愛子さまにお伝えくださったそうです。

コープビジターセンター職員のカムチャンさん

● カンボジア　若者の未来を守る。貧困の連鎖を断ち切る。

多くの地雷が残るカンボジアには、貧しさや、教育の壁も残されました。

皆さまのご支援で設立された農業訓練センターでは、若者たちが自然と共に生きる農業を学び、未来への希望に胸をふくらませて、共同生活をしながら学んでいます。

そんな若者たちの未来に、今またタイとの国境紛争がかげりを落としています。しかし負けることなく、歩みを進めています。

あなたの想いが現場を動かしています。
冬季募金キャンペーンへの参加方法は、次のページでご案内します。

テラ・ルネッサンスが、ウガンダ北部で元子ども兵の社会復帰支援に取り組んできて、まもなく20年の節目を迎えます。これまで活動を応援してくださった全ての支援者・関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

この20年、終わりの見えない紛争と子どもの徴兵に、何度も無力感に苛まれ、絶望を感じてきました。しかしそれ以上に、紛争で深い傷を負った元子どもたちと共に、「人は何度でもやり直せる」という希望を証明する日々でもありました。卒業生たちの活躍は様々ですがある元少女兵はテラ・ルネッサンスで学んだ洋裁の技術を活かして自立を果たしただけでなく、周囲の貧困層の女性たちに洋裁の技術を教えるための教室を開きました。またある元少年兵は、今やテラ・ルネッサンスの洋裁訓練講師として、後輩たちの未来を導いています。

そして今、私たちの活動は非常に重要な局面を迎えています。2023年、かつて武装勢力 LRA（神の抵抗軍）に誘拐された141名の元子ども兵とその家族が、ウガンダへ帰還しました。これを実現したのは、関係機関の協力に加え、私たちが支援し自立を果たした元子ども兵自身が、命がけで仲間を説得したからでした。

現在、次の帰還支援に向けた各所との交渉が大詰めを迎えています。この交渉が成功すれば、2026年には500名の元子ども兵とその家族を故郷に戻すことができます。これは LRA の解体、すなわち紛争の終結に直結します。

必ず故郷に帰す。そして紛争を終わらせる。

その歩みを止めないために、
引き続き皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

テラ・ルネッサンス
海外事業部長

小川真吾

冬季募金キャンペーンのご参加方法

必要金額5,000万円　期間: 2026/1/15まで

写真：カンボジア　プレアプット村の子どもたち
タイ・カンボジア国境紛争の影響で食べるものに困窮する中、子どもたちは無邪気に遊んでいる

1 今回のみのご寄付

１００円からでも思い立った時に
自由な金額設定が可能です

2 毎月定額のご寄付

ひと口１０００円 お好きな口数で
途中で金額変更も可能です

3 佐賀の返礼品 ふるさと納税でのご寄付

実質のご負担は２０００円で
大きな金額のご寄付も可能です

Q「少額の寄付をしたところで…」と思ってしまいます。役に立たないのではないですか？

A そんなことはまったくありません。

たとえば 500 円で、野菜の種が 1 缶買えます。飢餓が深刻な地域で、緑の畑が家族の生活を支えるでしょう。毎月 1000 円なら、一人の元子ども兵が毎月 10 食の給食を食べられます。なにより一人でも多くの皆さまのご参加が、どれほど私たちを力づけてくれるかを知ってください。

ご寄付はQRコードから

各種クレジットカード／銀行振込に対応

またはこちらのURLから
https://www.terra-r.jp/tokibokin2025.html

郵便振替をご希望の方は、同封の用紙をお使いください。

ご寄付についてご不明な点がありましたら、下記までお気軽にお問合わせください。
※ 現在お電話は受付専用です。ご用件をお伺いし、担当者より折り返しさせていただきます。

E メール：contact@terra-r.jp
お電話　：075-741-8786
（平日 10 時半～ 18 時）

ご寄付は税制優遇の対象となります／領収書発行いたします

活動ピックアップ

ラオス【シエンクワン】高品質な蜂蜜を世界へ ～夢の発進～

ラオス駐在員
岩村華子

ラオスのシエンクワン県は、過去、膨大な数の爆弾が投下され、現在も数多くの不発弾が地中に眠っています。

何世代もつづく負の遺産を抱えたシエンクワンは、同時に、平和の大切さを実感させてくれる土地。

テラ・ルネッサンスはここで、不発弾被害にあった方々や、地域の脆弱層の方々に、不発弾の危険がすくない「養蜂」の技術とビジネスの支援を行っています。

地域の自立を推し進めるため、政府、村人とテラ・ルネッサンスが協働で取り組んできた結果、2025年10月14日に、正式に「シエンクワン養蜂協同組合」が認可され、始動しました！現在は4郡15村から51名のメンバーが加盟しており、今後、さらなる拡大を目指します。

私たちは、シエンクワンの高品質で美味しい蜂蜜を、ラオスのみならず世界へ届けるという村人たちの夢を応援しています！

ウガンダ【カラモジャ】養殖という新しい挑戦

カラモジャ駐在員
川島綾香

「農業は不可能」と言われたウガンダ北部のカラモジャで灌漑農業を行っています。さらに今、灌漑用のため池を活用し、養殖事業をスタートさせました。タンパク源の確保や魚の販売による収入向上を目指すための取り組みです。

事業は着実に進んでいます。5月末には初めてティラピアを放流しました。「カラモジャで養殖ができるなんて信じてなかった」という驚きと、やる気に満ち溢れている受益者の姿を見てこちらも嬉しくなりました。

続く6月には、稚魚たちの栄養補助となるさつまいもの作付けを開始しました。餌を組み合わせながら稚魚が大きく育つように細かなケアを続けています。さらに7月に入って、なまずの放流も実施し、

5月末～7月頭にかけて、合計144 50匹（ティラピア8950匹、なまず5500匹）の稚魚を放流できました。

8月には予想外の大雨で魚もかなり流されてしまうというピンチがありましたが、魚が残っていることを確認！さらに、マーケット調査で需要があることも確認できました。

現在カラモジャに流通する魚は遠方から輸送されています。私たちが地域で供給できるようになれば、地元の方は新鮮な魚を手に入れられ、受益者の方々の収入も見込めます。

この養殖事業はただ魚を育てるだけでなく、新たな産業を生み出し、生きるための争いをなくすことのできる、未来に繋がる活動だと信じています。

タイ・カンボジア国境紛争 緊急支援報告

カンボジア事務所長
江角泰

7月24日のタイ・カンボジア両国の国境地帯で始まった武力衝突。

国境地帯には避難勧告が出されましたが、簡単に居住地を離れられない方々も多くいました。そうした国境地帯の村の取り残された人々に対して、テラ・ルネッサンスは緊急支援を行ってきました。

事業地であるプレア・プット村では、日雇いの仕事も減って収入もない状況でした。子どもたちは楽しそうに元気に遊んでいましたが、今日食べるものもないという切実な声を受け、7月末に26世帯へ即日お米を配布しました。

8月上旬には、サムロート郡で以前から家畜飼育支援を行っていた40世帯（多くは家畜のために一人で村に戻った方々）へお米50キロを配布しました。

お米がほとんど残っておらず、「どうしようかと思っていたので助かった」と切実な感謝の言葉が寄せられました。

皆さまの継続的なご支援があったからこそ、このような状況にも即日対応ができました。

若者に対する農業訓練を行っているロカブッス村では、国境紛争の影響で、タイから帰還し、仕事のなくなった出稼ぎ労働者の世帯が急増していました。最終的に92世帯へお米の配布を実施し、事業地内での深刻な経済的な影響に対応しました。

緊急支援から数か月が経過した現在、配布したお米が尽き、わずかに残るお米を分け合っている状況です。引き続き現地で寄り添いながら具体的な支援を検討し、活動してまいります。

ウクライナ　親を亡くした子どもたちに学用品を支援

ハンガリー事務局駐在員
コーシャ・バーリン・黎

9月11日、ウクライナのウジュホロドにて、戦争で親を亡くした子ども達に、ノートや筆箱、筆記用具や新学期の学校教材を配りました。大変喜ばれました。

ウジュホロドの戦没者を祀る墓地にも行ってきました。

去年に比べて戦死した地元の兵士の数がかなり増えていました。

ウガンダで夢を紡ぐ旅へ

文：佐藤 翔（啓発事業部）

この夏、ウガンダの「スマイルハウス」を訪れるツアーを実施しました！今回は、三年に一度の「ドリームプランプレゼンテーション（以下、ドリプラ）」を開催。紛争で傷ついた元子ども兵たちが「過去」を乗り越え、「夢」と「未来の計画」を発表する場です。

「9歳で誘拐され家族と16年間会えていない」「戦場で撃たれた銃弾の痕が今も痛む」など、信じられないような言葉に、私は圧倒され続けました。それでも彼ら・彼女らは、決して自分のためだけではない、家族や隣人を想う夢を語っていました。

今回のツアーで最年少の高校3年生、坂倉ひなこさんも、世界のさまざまな問題に立ち向かいたいというご自身の夢を発表しました。不登校だった過去を語ってくれた彼女に、元子ども兵たちが「境遇が似ている」と寄り添い、共感の橋が架かりました。

壮絶な過去を持つ彼ら・彼女らが、葛藤を抱きながらも笑顔で、堂々と未来の夢を語る姿に、私はこう思いました。元子ども兵たちは貧しくも、かわいそうでもありません。ドリプラは、人が持つ強さと可能性を、私に教えてくれました。

左：車両に「夢」の大きな幕を掲げて出来た、手作りのステージ。笑顔で手をつないだ。

実習に真剣に取り組む元少女兵たち
教室に、足踏みミシンの音が響き渡る

アチョリ族の歓迎ダンスでお出迎え！
笑顔に誘われて一緒に踊る皆さん

「子どもには笑顔で生きてほしい」
と夢を語った元子ども兵の青年

特別寄稿

元子ども兵支援事業20周年に寄せて

松緑神道大和山
教主　田澤清喜様

ウガンダにおける元子ども兵の存在を知ったのは21年前。２００４年、平和活動のあり方を見つめ直していた時期に、鬼丸さんからお話を伺ったのがきっかけでした。２００５年、スマイルハウス建設から活動に関わらせていただきました。名前を付けるよう依頼を受け、子どもたちの悩みや希望を考える中で、自分の表情に「笑顔」がなかったことに気づきました。笑顔はお金や時間がなくても、自分の心次第でつくることができる―そう思い、「笑顔で生きられる場所」を願って「スマイルハウス」と名付けました。２００６年には「里親運動」を提案しました。生きるために過酷な選択を強いられた子どもたちに、どう寄り添えばよいのか悩み続けました。血や国籍が違っても「親になろう」と思い、自ら親の立場で共に歩むことを心に決めました。

その思いに共感した多くの方々の協力で、運動として実現しました。

２０１６年の節目に卒業生のその後を知りたいとお願いしたところ、すぐに調査を行ってくださり、多くの子どもたちが自立して生きていることを知りました。大きな喜びと安堵を覚えました。

20年の歩みを通して、「支援する・される」ではなく「共に生きる」関係の大切さを教えていただきました。

笑顔あふれる場所をつくり続けてこられた鬼丸さん、小川さん、トシャさん、吉田さん、ウガンダ事務所の皆さん、そしてこの活動を支えてきた多くの方々、元子ども兵の皆さんに、心からの感謝を申し上げます。

2025年8月現在のスマイルハウス

建設中のスマイルハウス

全文はウェブサイトでお読みいただけます

terra-r.jp/news/oshirase/oshirase_voive202511

「スマイルハウス」の外壁には元子ども兵たちによるウォールアートが描かれており、
絵の下には、支援者様への感謝のメッセージが添えられています。
「あなたがたの愛と支援が、私たちに希望をくれました。ありがとう」

＼現地を見て、出会って、学びあう。来年のスタディツアー開催が決定しました／

日本の皆さんに見てほしい！手作り雑貨の
マルシェを開催してくれた元子ども兵たち

メッセージ

設立記念日の10月31日に、新タグライン を発表しました！

「願いをチカラに、平和をつくる」に込めた、私たちの誓い

文：理事長・広報室長兼務　吉田 真衣

『結晶母』をお読みの皆様、こんにちは。理事長の吉田です。この度、私たちテラ・ルネッサンスは、新しいタグラインを発表いたしました。

タグラインとは、私たちの「決意と未来への誓い」です

約半年の対話を経て「私たちが何者であり、どこへ向かうのか」を凝縮した、「決意と未来への誓い」です。そこに込めた想いを、大切な仲間である皆様と共有させてください。

「願い」か「想い」か？ 最後は決戦投票で——

特に最初の「願い」は、大きな議論の末に決まりました。「想い」も有力でしたが、現地の人々の声にはもっと切実な響きがあります。「これは単なる『想い』だろうか？いや『願い』そのものではないか？」最後は、「決戦投票」で、「願い」という言葉を選びました。このプロセスこそ、みんなで組織をつくるテラ・ルネッサンスらしさだと感じています。私たちの「何かしたい」という願いと、現地の人々の「安心して生きたい」という願い。この二つの重なりこそが、私たちの原点です。

「チカラに」—願いを、行動と希望へ変えるプロセス

私たちと現地の人々の願いが結びつき、未来をつくる「チカラ」へと変わります。一つひとつは微力でも、決して無力ではない。「願い」が集まれば大きな力になる。「チカラ」にはそんな想いを込めました。

「平和をつくる」—私たち全員で成し遂げる、能動的な行動

「平和をつくる」という言葉には、「一人ひとりに未来をつくる力がある」というこれまで大切にしてきた信念を基盤としつつ、私たち自身が平和の主体的な『つくり手』となるのだ、という強い決意と覚悟を込めました。平和は誰かが与えてくれるものではなく、主体的に「つくる」もの。一人ひとりの行動の積み重ねの先に平和があると確信しています。

願いをチカラに、次の25年へ向けて

2026年には、テラ・ルネッサンスは設立25周年を迎えます。新タグラインを旗印に、皆様の「願い」を「チカラ」に変える、様々な新しい取り組みを準備しています。皆様と共に、世界平和の実現に向けてこれからも共に歩みを進めましょう。

吉田 真衣

願いをチカラに、平和をつくる

テラルネ「らしい」字体選びは理事長と啓発事業部、広報室、事務局本部の代表者で討議。ついに決定した瞬間がこちら

10月入職

今成 祥　いまなり あきら　imanari akira

国際運動推進部 グローバル人財育成事業

はじめまして。国際運動推進部グローバル人財育成事業担当の今成祥と申します。今年の１０月に入職いたしました。

前職は地元・群馬で ICU 看護師として勤務しておりました。一見全く異なるキャリアですが、高校時代から元子ども兵の社会復帰支援に携わりたいという強い思いがあり、大学院では元子ども兵の社会復帰を医療的側面からも研究していました。昨年大学院を卒業し、この度念願叶ってテラ・ルネッサンスの一員となりました。

現在は佐賀事務所で勤務しており、人財育成事業担当として、普段から高校生や大学生と関わる機会が多くあります。私自身、高校時代に子ども兵の存在を知ったことが、現在のテラ・ルネッサンスでの活動につながっています。

今度は私が、未来を担う彼らにポジティブな影響を与えられるよう、世界平和の実現に向けて職務に邁進してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

佐々木事務局長・国際運動推進部部長からAIを用いた資料作成のトレーニングを受けている様子

10月入職

岩村 華子　いわむら はなこ　iwamura hanako

ラオス事務所プロジェクトマネージャー

はじめまして、ラオス事務所の岩村華子です。これまで、国際協力、特に教育分野に携わり、パラグアイ、エルサルバドル、メキシコで長く活動をしてきました。

この度、ご縁があり、東南アジアの癒しの国ラオスに赴任いたしました。豊かな自然と温厚な人々によってゆったりとした時間が流れる国。しかしながら、ベトナム戦争の負の遺産である不発弾が１０００年かかっても撤去できないほど残存していることは、日本ではほとんど知られていません。

私たちは、ラオス北部の特に不発弾が多く残る地域で、子供たちへの不発弾回避教育や、不発弾被害者世帯や貧困層を対象に、養蜂などを通じた生活自立支援に取り組んでいます。

赴任日初日、ラオス事務所でスタッフたちとランチをした様子

2026 年は設立 25 周年。3 都市で感謝を伝えるイベントを企画しています！

Terra Renaissance 25th anniv. Journey to peace since 2001
25周年記念イベントロゴ

25 周年テーマ：ジャーニー・トゥ・ピース

Journey to Peace
— それぞれの平和への旅路 —

2026.6月13日(土)　京都市内
2026.6月14日(日)　佐賀市内
2026.6月20日(土)　東京 日本橋

お会いできるのを楽しみにしています！

記念ロゴは、過去から現在、そして未来へ続く歩みをイメージ。デザインが得意な私が候補を作り、みんなの投票で決めました！

タイ事務所
張（ちょう）

今回の寄付をする

ご寄付は、あなたからのメッセージ。
その先の人々へ、しっかりと届けます。
思い立ったときに好きな金額で。
あなたの気持ちを届けてください。

毎月の寄付をする

ひと口 1,000 円から。
毎月のご寄付が、
自立をめざす人々の背中を支えます。
どうか、わたしたちの仲間として歩んでください。

テラ・ルネッサンスでは、毎月の定額寄付で活動を支えてくださる方々を「ファンクラブ会員」とお呼びしています。この名前には、ただ応援してくださるという意味だけではなく、共に歩み、平和をつくる仲間という想いが込められています。

世界で起きていることを「自分ごと」として受けとめ、その声を周りに伝えてくださるファンクラブ会員の皆さま。その存在は、まさに〝ファンタスティック〟――

喜びや情熱をもって行動する、希望のコミュニティです。支援を超えた共創の輪を、あなたも私たちと一緒に広げていきませんか。小さな一歩が、誰かの未来を照らします。

寄付・支援の入り口はコチラ

テラ・ルネッサンス

☎ 075−741−8786

月〜金 10時半〜18時

Peace Builders 平和をつくる仲間たち

こんにちは! テラ・ルネッサンス広報室マネージャーの下野です。

先日東京・丸の内で、大学生の伊藤巴菜さんが企画した飲食イベントにおじゃましてきました。伊藤さんは高校生のときに「子ども兵」について知り、テラ・ルネッサンスに興味をもって、鬼丸昌也の書籍を読んだりしたそうです。

そんな伊藤さんは今、ウガンダで作られたチョコレートを日本で販売し、現地の人々の生活向上をはかる取り組みを始めています。

「売り上げの一部をテラ・ルネッサンスの活動に寄付したい」。アルバイト先のお店がそうした思いに賛同して、特別メニュー「ウガンダチョコレートフルコース」の夕べを開催。約20名ものお客様が集まって、美味しいフルコースを楽しみながら、ウガンダの話を熱心に聞いてくださいました。

一人の想いに周りが共鳴して、さらにその輪を広げていく――このような種まきをふやすために、私も微力ですが、できることをがんばります!

微力だけど、無力じゃない

国連経済社会理事会特殊協議資格NGO
認定NPO法人テラ・ルネッサンス
〒600-8191 京都市下京区五条高倉角堺町21番地Jimukinoueda bldg.403号室
Tel:075-741-8786 / Email: contact@terra-r.jp